朝日新聞 29年3月18日（朝刊別刷り特集）

みちのものがたり

小樽運河（北海道）

階段のようにせり上がる街

雪に覆われた小樽運河沿いを歩いた。観光コースから外れた北運河と呼ばれる北部には、大正期に運河が出来た頃の建物が残る。古い写真と見比べても、景色はあまり変わらない。違っているのは、港湾労働者たちの威勢のいい掛け声が響いてこないことだ。

「冬が近くなると、ぼくはそのなつかしい国のことを考えて、深い感動に捉えられている。そこには運河と倉庫と税関と桟橋がある」

プロレタリア作家の小林多喜二（1903～33）は1930（昭和5）年、初めて迎える東京での冬を前に、児童文学作家の村山籌子宛ての手紙にそう書いた。

治安維持法違反で検挙、東京の曖昧な拘置所に、7カ月間収監されていたときのことだ。加えて、「蟹工船」（29年）で、献上品缶詰に「石」ころでも入れておけ！」と言いたことが不敬罪にも問われていた。手紙はこう続く。

「人は真ッ青な空の下を、どれも背をまげて歩いている。ぼくは何処を歩いているのだ？　どの人をも知っている。赤い断層を処々に見せている階段のように山にせり上がっている街を、ぼくはどんなに愛している分からない」

秋田・大館の没落農家に生まれた多喜二は、伯父を頼って4歳のとき、一家で小樽に移住した。伯父のパン工場で働きながら小樽高等商業学校（現・小樽商科大）に進学し、卒業後は北海道拓殖銀行に勤務しながら作品を書いた。29年に拓銀を解雇され、翌年上京。33年2月20日、特高警察によって築地警察署で拷問死するまでの3年間を除けば、29年間の生涯の大半を小樽で過ごした。作品の多くも小樽を背景にしたものだ。

第1次世界大戦で、ヨーロッパにかわって穀物輸出が急増、小樽港には北海道内から様々な物産が集まった。人口も15万～16万人に達し、今より数万人多かった。

運河・港近くの労働者街、中産階級が集まる坂の中腹の文教地区、富裕層の屋敷が並ぶ山手……。山が海に迫り、坂が多いこの街では、階層によって暮らす場所が分かれていた。

多喜二によると、小樽は北海道の「心臓」。近代日本の内なる植民地だった北海道の「大きなリトマス試験紙」のように時代の波に反応する街であると捉えていた。

いま響く　多喜二の言葉

シカゴ大学名誉教授のノーマ・フィールドさん（69）は、祖母の出身地でもある小樽に1年間暮らして、多喜二を研究した。多喜二の手紙の「どの人をも知っている」という一文に注目する。

「資本主義の矛盾のしわ寄せを受けて、背をまげて歩かざるを得ない人々のための階級闘争に身を投げながら、全体を知ろうとし、全体を愛している。出自によって相手を差別せず、憎しみでは終わらないことを知っている。この人なつっこさが、多喜二の最初にあるものです」

敵後、プロレタリア文学は読まれなくなり、小林多喜二の作品も忘れられていった。悲惨な最期も、時がたつにつれて遠い出来事になった。

2008年、そんな多喜二がこつぜんとよみがえった。「おい地獄さ行ぐんだで！」で始まる「蟹工船」の文庫が、「ワーキングプア？　それって蟹工船じゃないか」という宣伝文句で売れ始め、08年だけで56万部のベストセラーに。「蟹工船（ブーム）」はその年の新語・流行語大賞のトップテンにも選ばれた。

06年に出版されていた「マンガ蟹工船」も、ブームの据野を広げるのに一役買った。仕掛けたのは、IT大手、日本オラクル元社長の佐野力さん（76）。「作家としての功績をもっと広く伝えたい。原作を読む手引きになれば」との考えからだった。

03年から4回にわたって国際シンポジウムや、若者を対象に「蟹工船」のエッセーコンテストも企画した。佐野さんは小樽商科大の卒業生。学生時代に拷問死した遺体の写真を見たときの衝撃が忘れられない。「国家が抹殺した多喜二を復権したかった」

くしくも、研究者の間で作品を再評価する機運が高まっていた時期にも重なった。フェリス女学院大の島村輝教授（59）によると、03年から5年間で、過去50年分に相当するほどの新たな多喜二研究が進展したという。「文学として面白い。構成や仕掛けもよく出来ていて、突出した才能とスター性があると思う」

21世紀の研究者たちが注目したことの一つに、女性の描き方がある。多喜二の作品ではほとんど男性しか登場しない「蟹工船」は例外に近く、実は女性を扱った作品が多い。「人間が丁寧に描かれ、一面的ではなく、簡単に結論を出さない。フェミニズムの立場からも読み取りができる女性像を多く描いている」と島村さんは話す。

多喜二の女性観に決定的影響を与えたのが、拓銀時代に出会った恋人田口タキの存在だ。窮乏した家族のために身売りを余儀なくされたタキに恋して、救済しようとした。タキを通して知った社会の底辺に生きざるをえない女性の現実。単なる同情を寄せる男性の偽善や、女性同士が励まし合う姿も描いた。

人なつっこく、女性に威圧感を与えない多喜二。そんな素顔は、友人たちの証言からもうかがえる。真面目でよく気がつく一方、優しくユーモアとちゃめっけがあり、チャプリンのマネをしてはよく人を笑わせた。

「左傾思想」の持ち主として拓銀をクビになったときは、送別会が2度にわたって開かれ、支店のほぼ全員が出席。2日目は女性・給仕たちの会で、みんなが泣いて別れを惜しんだ、といわれる。

作家の高井有一は、多喜二の全集月報で、作品の特徴として「どのような苛酷な題材をあつかっていても、不思議に明るい楽天性が感じられ」ると書き、その理由を「人間への信頼を失わなかったからだ」と読み解いた。

蟹工船ブームから9年。「共謀罪」の趣旨を盛り込んだ組織的犯罪処罰法改正を、政府が目指す動きに呼応して、今年はまた多喜二の名を聞く機会が増えている。

3歳から中学まで小樽で過ごした精神科医の香山リカさん（56）は、2月に国会前スピーチで多喜二に触れた。

「蟹工船ブーム当時と今とは状況が違う。共謀罪やフェイクニュース、言論弾圧で殺された多喜二の人生そのものがリアルに感じられるようになってきた」

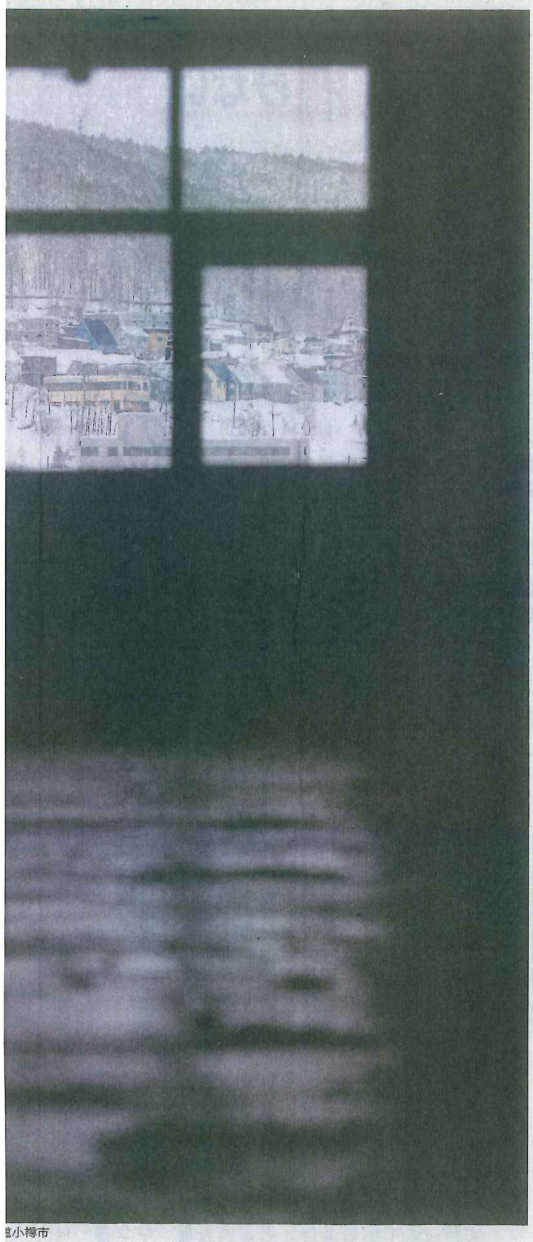
小樽商科大の荻野富士夫特任教授（69）は、特高警察などの歴史に詳しい。満州事変以降、多喜二は作品で反戦、反軍思想を明確に打ち出すようになった。「しかも民衆にも戦争を支持する動きがあることを描写している。多喜二は戦争を推進するからくりを見抜いていた。だからこそ特高のターゲットになった」

厳しい現実を描きつつ、かすかな希望を示して終わる多喜二の小説。「蟹工船」も最後は「そして、彼等は、立ち上った。――もう一度！」。

荻野さんは言う。

「シュンとするのではなく、どこかに展望があると、希望を持っているんです。あきらめてはいけないと。その言葉はいま、響きますよ」

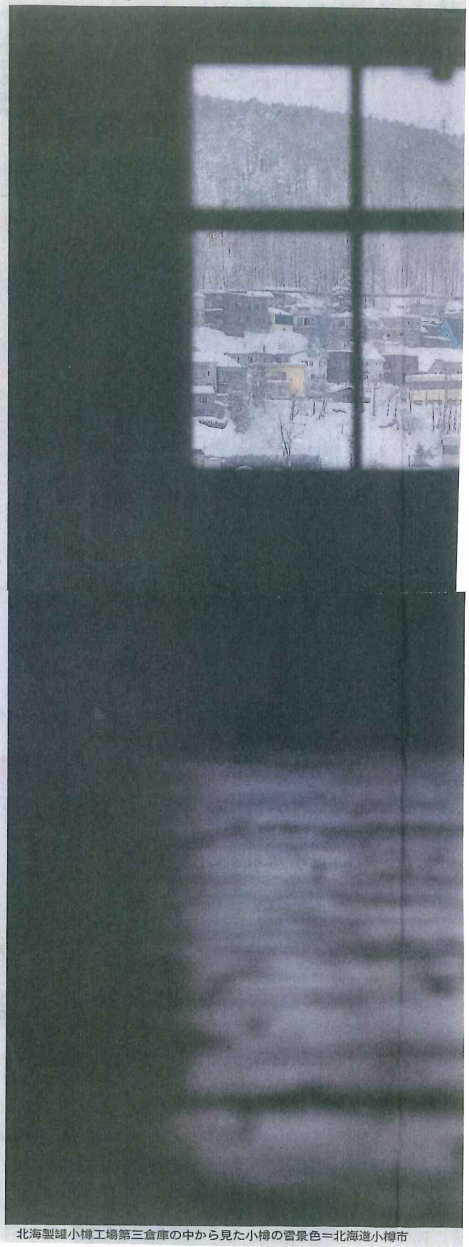
文・林るみ



写真・白井伸洋

撮小樽市

雪が舞う小樽運河＝北海道小樽市



北海製罐小樽工場第三倉庫の中から見た小樽の雪景色＝北海道小樽市

今回の道

現在の小樽運河は長さ1キロ余、幅20～40メートル。完成は1923（大正12）年。小樽港の修築が必要となった際、運河か埠頭かの論争の末、海面を埋め立て、一部を水路として残して運河を造るという方法が選択された。戦後、埠頭が整備されると役割を失い、1986年には自動車道路建設のため、一部が埋め立てられた。これに先立つ反対運動が全国的に注目され、運河が観光スポット化するきっかけになった。

埋め立てを免れた「北運河」には、小林多喜二＝写真＝が小説「工場細胞」（30年）で、「軍艦を思わせた」と書いた「H・S製罐工場」のモデルとされる旧北海製罐倉庫（現・北海製罐）の工場が当時の姿を残す。

ぶらり

かつては北海道の金融経済の中心だった小樽。「北のウォール街」と呼ばれた色内（いろない）地区には、小林多喜二が勤務した旧北海道拓殖銀行小樽支店＝写真上＝など、当時のままの重厚な建物が並ぶ。同支店は、家具チェーンが運営するニトリ小樽芸術村が取得し、7月に似鳥美術館をオープンする予定だ。

すぐ近くの市立小樽文学館は、多喜二のデスマスクや書簡、蔵書などを展示する。

小樽の歓楽街・花園銀座の近く、小高い丘の上の水天宮＝写真中＝は海運の守り神をまつる。眺めがよく、多喜二と恋人だった田口タキがデートした。

小樽商科大前の坂道＝写真下＝は急な勾配で「地獄坂」と呼ばれる。多喜二は小樽築港駅そばの自宅から4キロを歩いて通学。1年後輩には作家の伊藤整がいた。

読む

小林多喜二の代表作は各社の文庫や新書で読める。その生涯をたどるには、ノーマ・フィールド『小林多喜二』（岩波新書）や『新潮日本文学アルバム　小林多喜二』（新潮社）、手塚英孝『小林多喜二』（新日本出版）がお薦め。公開中の映画「母　小林多喜二の母の物語」の原作は三浦綾子『母』（角川文庫）。

読者へのおみやげ

小樽商科大限定版の北海道産山桜製ストラップを6人に。住所・氏名・年齢・「18日」を明記し、〒119-0378晴海郵便局留め、朝日新聞be「みち」係へ。23日の消印まで有効です。